

2021年9月12日 聖霊降臨節第17主日礼拝メッセージ

「7の70倍までもゆるせ」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 18章 21-35節

昔、私が京都に住んでいた頃の教会の友人で、非常に変わったというか、面白い人がおりました、とはいっても面白いところでもあり、悪いところでもあるんですが、非常によく嘘をつく癖がある人だったわけです。例えば、「自分は実はFBIのような探偵で、周りのみんなには内緒にしているけれども、いろんな裏の仕事を内緒でしているんです」とか、「自分は実は拳法の使い手で、時々裏の世界で非公式の試合をしているんです」とかある時は、「僕はある走り屋のチームのリーダーをしてもう引退したいんだけど後継者がいなくて困っているんです」とか、他にも「キリスト教の別の教派の牧師試験に受かったので今開拓伝道を始めるところです」などなど、よう思いつくなあそんな話いろいろと、といった話を次から次へとしてくるわけです。どう好意的に見てもそんなことは絶対にはないんですけど、当の本人は大真面目で語りかけてくるわけです。まあきっとそれを話している時には彼自身が本当にそう思い込んでいるのかも知れません。そして、なぜそんな話を私やその他いろんないわゆる「親切な人」にするのかというと、やはり「すごいねえ」という賞賛の言葉を聞きたいから、みんなに認められたいと思っているからでしょう。

しかし、そんな彼の願いとは裏腹に、彼はいつも周りの多くの人から軽んじられ、避けられておりました。まあそんな架空の話を真面目に聴くのも、初めはよくてもだんだんとこちらが空しくなってきたり消耗しますし、彼もそのようなこちらの反応にあまり気付いてくれない人なので、当然の結果であるかもしれません。そうして、みんな認めてくれないから、でかい話をしたがる、そんな話しかしないから、みんな彼のことを軽んじる、といった悪い流れがいつの間にかできてしまっていたのです。彼自身も、いつまでたっても自分への評価がよくなることを非常に不満に思っていたらしく、いつも顔を合わせると「みんな僕のことを分かってないんです」、「僕の言うことをぜんぜん信じてくれないんです」とこぼしていました。

しかし、そのうちに彼の周りに対する不満は敵意に変化し、やたらと過激なことを言うようになりました。ちょうど昨日、9・11のアメリカ同時多発テロから20年の節目の日でしたが、まさにそのテロ事件に引っ掛けて「僕は日頃みんなにばかにされている。自分の尊厳を守るためには「聖戦」を仕掛けなければいけない、ジハードだ」とか、「自爆テロの準備はできています」とかいう言葉が増えてきました。愛唱聖句はローマ12章の「『復讐は私のすること、私が報復する』と主は言われる」。ここは文脈からすると全く逆のことを言っていて、「私が復讐するからお前は

復讐するな」ということを言っているのですが、とにかくこの「私が復讐する、報復する」という言葉の響きが悪かったようで、彼はいつもこの言葉を唱えていたものでした。私がある時「イエス様は聖書で 7 回の 70 倍赦せて言ってるやん」というと、少々納得したようですが、次に会った時には「7 の 70 倍ということは、490 回までは赦せてことですね」といって、「489、488…」カウントダウンなんか始めちゃったりして。もう何度言っても無駄で、彼の頭の中には 490 回という限度がインプットされてしまったようでした。もちろん、自爆テロだ何だとは言っても、そんなものの口だけだとは知っていましたし、実はとっても優しく繊細で、礼儀正しい青年なのですが、しかしそのやたらと極端な物言いには、私もイライラさせられたものでした。その彼とももう 20 年近く会っておらず、今どうしているかも分からないのですが、今振り返れば、彼に医療の面（力になってくれる病院）や福祉の面（障がいの認定や年金、日中活動の場所など）からのサポートがもう少しちゃんとあれば、まだ地域で暮らしていきやすかったであろうに、当時はそんな知識もなく、ただ寄り添うだけで精いっぱい、ごめんね、という思いでおるわけです。

さて、本日の聖書は「仲間を許さない家来のたとえ」となっている箇所ですが、この話はまず、ペトロが「主よ、兄弟が私に対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。7回までですか」と尋ねたときに、「7 回どころか 7 の 70 倍まで赦しなさい」とイエス・キリストが答えた、というところから始まっています。よく「仏の顔も 3 度まで」と言われます。人が仏様のお顔をやたら撫で回す、それは実は当の仏さんとしてはあまり気持ちのよいものではないものの、それは信仰心の表れで悪気のないものかもしれないので、3 回までは仏さんもまあ我慢して許すけれども、しかし 4 回目ともなれば仏さんといえども流石に「いいかげんにせえ」と怒り出すよ、というような意味のことわざです。まあ仏でない私たちも、仏様をみならって、3 回目くらいまでは同じ失敗でも大目に見て許す心を持ちたいものよと思うわけですが、不思議なことに、聖書の時代のユダヤにおいても、一般的に赦しの限度は 3 度までとされていたようです。まあそれが、古今東西私たち人間の普遍的な我慢の限界だということなのかもしれません。では今日の聖書において、ペトロはなぜ「7 回までですか」と尋ねているのでしょうか。

ペトロは、イエス・キリストの一番弟子を自認していたので、イエスの教えを一番よく分かっていることをイエスに認めて欲しかったのかもしれませんが。「先生は以前、復讐してはならない、敵を愛しなさいとおっしゃっていましたから、兄弟の罪も、3 回といわず、7 回までは赦すくらいにならないといけないですよー」。このようにペトロは、一般的なゆるしの限度である 3 回を 2 倍して、さらにもう 1 回足して加えるほどの数、人間の限度をはるかに超える数を出して、めちゃくちゃ寛大になったつもりでイエスに尋ね、イエスに「その通りだ。お前はよく私の教えが分かっているな」とほめられることを期待していたんです、きっと。しかしそれに対してイエスは「7 回

どころか7の70倍まで赦しなさい」と言われたわけです。それは、ペトロの想像さえもはるかに超えた、まさに無限にゆるすことを意味する答えでした。イエスは、罪の赦しというものはそもそも、「これで何回目」などとカウントするようなものではなく、何度でも、無限に与えてゆくものなのだとされたのです。イエスにとって、「これで何度目の赦しだ」「これで何回赦した」などと数を数えること自体、まったく無意味なことだったわけです。

「罪」とは、「的を外す」ということからきた言葉であるといえます。「的を外す」とは、本来あるべき状態から外れることです。神様が私たちに与えられた最大の掟、「神を愛し、隣人を自分のように愛する」という掟からは、神様と私との関係、また私たち同士の関係、そして私と自分自身との関係を大切にするように神様が望んでおられることがわかります。神様は私たちに、自分がこの世に1人で生まれ出て、1人で生きているわけではないことに気付いてほしい、つまり、親をはじめとする様々な隣人や、その他この世界の多くの仲間たちを与えて下さった神様の豊かな恵みに気づき、また、その恵みをこの世界の多くの隣人たちと分かち合い、互いに尊敬しあいながら命を生きて欲しい、さらにこの自分という存在も、かけがえのない一人としてありのまま受け入れ、大事にしてほしいと神様は願っておられるのです。しかし私たちは時に神様に背を向け、隣人との関係を切り捨て、自分自身のことさえも受け入れることができなくなってしまうことがあります。そのように神様の望まれたそれぞれの関係性を私たちが断ち切ってしまうことが、あるべき姿から外れるということ、的はずすこと、すなわち罪であるわけです。

そしてその罪からの回復、的を外れてしまった状態からの回復、神や隣人や自分自身との関係性の回復というものは、私たち弱く不完全な人間の力、いわゆる道徳的な努力だけでは不可能だといわざるを得ない。関係を断ち切るという罪からの完全な回復は、3度まで、あるいは7度までという限界の設けられた赦しや和解の中では到底不可能であり、そこには、7の70倍と表現されるほどの無限の赦しの力が必要なのです。しかし、ただでさえ弱く不完全な私たち。どうやったら7の70倍などと道徳的な努力の限界を超えることができるのか。例えば自分の大事な家族を無惨に奪った者に対して、私たちは無限の赦しを与えることができるのか。みなさんの頭の中にも、最近の出来事で思い当たることがあると思いますけれども、口では何とでも言えるし頭でも理解はできることですが、しかし現実にはほとんど不可能だ。私たちだって、神様であっても、そんな哀れな人に向かって「辛いでしょが、赦しておあげなさい」なんてとても言えない。だからこそ、罪を犯した者自らの「悔い改め」「どうか待って下さい」という懇願がほしいのです。

きっと神様は、何でもかんでもただ無条件に赦せとは言っておられない。赦そうにも、罪を罪と感じていない者を、私たちは赦しようがないからです。「ゆるす」には2

つ漢字が使われます。「許可」の「許」と「容赦・恩赦」の「赦」です。キリスト教界でよく使われているのは、「赦」の方であるように思います。漢和辞典で「赦」を調べますと、左の部分は「ゆるむ」という意味で、右の部分は人が鞭を打つ姿が変化した形であり、あわせて「鞭を打つ手をゆるめる」「鞭を打つことを止める」という意味なのだそうです。ですから、罪を赦す前には相手が悔い改めへと導かれるための厳しい罪の指摘が必要なのです。アンゼラム・グリューンという人は「ゆるしは激しい怒りの後に起こるものであり、怒りに先立つものではない。ゆるせるようになるためには、あなたはまず、他人から与えられた悲しみを認めなければならない」と語っています。キリスト教はよく「愛の宗教」などと言われますが、しかしその愛とは、ただ何でもかんでも受け入れて赦すばかりの愛ではなく、それは間違っている、それは神様の目には正しくないのではないかと隣人に問いかける厳しさをも含んでいるものである、ということをお忘れずになりたいと思います。ルカ 17:4 には「1日に7回あなたに対して罪を犯しても、7回『悔い改めます』と行ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」とありますが、このように罪を犯してしまった者が「悔い改めます」と言うなら、何度であろうと、7の70倍であろうと、あなたたちは赦してやりなさいとイエスは言われています。その時こそ、神様の力、あるいはイエス様の力添えによって私たちは、道德の限界をはるかに超えて赦す力が与えられることを信じたいと思います。

しかし、それでもなお、自分の悲しみと怒りを認め、相手の悔い改めを促すことによってなお、赦すことができないこともあるでしょう。赦せない怒りの気持ちを抱えながら、その相手を赦そうとするというのは大変苦しいことです。しかし「怒り」は相手と距離をとることを可能にし、その結果、自分と相手とを冷静に見つめなおすことで、相手の犯した罪とその怒りから自分を徐々に自由にしてくれるのだ、と先ほどのグリューンは言います。ですから私たちは、自分の罪に気付いていない者に対してはその罪に気付かせ、罪を悔い、赦しを求めている者に対して、私たちは神様にその者を赦す心を与えて下さいと祈り求めていけるようになっていきたいものです。イエス・キリストは、そんな時の私たちの複雑な思い、苦しい思いをも、きっと共に担って下さるのです。

最後にもう一つ、自分に罪を犯した者だけでなく、自分自身に対する赦しも私たちにとっては同じくらい必要です。私たちはよく、自分自身のことをだめに思ってしまうこと、自分の罪深さや醜さに押しつぶされてしまいそうになることがあります。ああ自分はだめな人間だ、しょーもない人間だ、自分に本当に生きている価値はあるのかと、自分を否定する気持ちに飲み込まれてしまいそうになることがあります。どうぞ、そんな自分のことも、7の70倍までも赦してあげてほしいと思っています。私が私のことを赦してあげないでどうするんですか。自分自身に対しては特に、責めすぎることなくたくさんゆるしを与えていただけたらと思っています。